
バカとけいおん！と召喚獣

直井刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとけいおん！と召喚獣

【NZコード】

N4050N

【作者名】

直井刹那

【あらすじ】

バカテスの文月学園にけいおん！のメンバーたちが入ってきて、オリ主や明久たちバカテスキキャラと軽音部で学園生活を過ごしていく物語です。

IJの物語の設定？

この物語は『バカとテストと召喚獣』の一次創作です。
また『けいおん！』とのクロスものです
オリ主が幼馴染の明久ともう1人の幼馴染と
秀吉、雄二、ムツリー等のFクラスメンバーやAクラスメンバーと
そしてけいおん！の唯・澪・律・紬や憂・和・梓たちと
楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。
バカテスとけいおん！の話を混ぜながらの話になります。
また、この物語は明久たちが入学してからの物語になります。
1年次はけいおん！メインの物語で、
2年次からバカテスメインにしていきたいと思っています。

物語設定？

この物語は『バカとテストと召喚獣』と
『けいおん！』のクロスものです

設定

- ・オリ主が明久たちバカテスマンバーと一緒におん！メンバーと文月学園にて日々を送っていきます。
- ・明久はもちろんの事、観察処分者です。
- ・オリ主と明久が軽音部に入部します。

原作との変更点

- ・明久は姫路に恋心を抱いていない
- ・開始が2年時ではなく1年時からになります。
なのでオリ話になる可能性があります。
- ・また、1年時はけいおん！メインでいき、
2年時からバカテスマインになります。

また書いているうちに変更する場合があります。
それでも良い方は呼んで頂けると嬉しいです

プロローグ 天然少女との出会い

まだ肌寒い3月。俺達はとある高校に向かつて歩いてた。

智也「……」

陽一「ハア……」

智也「……」

陽一「ふう……」

明久「……」

陽一「あああ……」

智也「……おい」

陽一「……なに?」

智也「わつわからぬやこんだけど」

俺は隣りを歩く俺の悪友である『春原陽一』に向かつて言ひ。

陽一「しかたねエじやん!! 緊張してんだから!!
心臓が破裂しそうな勢いなんだよ!!
だから緊張してんだよ!! ビビッてんだよ!!」

智也「…落ち着けよ。日本語がおかしいぞ。

あと急にテンションあげんな…かなりウザいから

陽一「ウザいとか言つなよー傷つくだろー！」

……はあ。つうか、なんでお前そんなに落ち着いてんの？

今日が何の日か分かつてんのか？」

明久「高校の合格発表の日だよね」

そり。今日は文翔学園の合格発表の日だ。

陽一「そうだよーなのにアナタたちはそんなに落ち着いてるんですか！？」

フツー緊張するもんじょうがーー！」

智也「俺はお前と違つて受かる自信あるしな。

それに明久を見てみるコイツだつて落ち着いてるだろうが

陽一「うわッ！ウゼー！つてなんで明久も落ち着いてるんだ？」

明久だつてあまり成績良くないだろ？こっち側でじょうがー！」

？」

明久「まあそりだけど…」しまできたら腹くくるしかないしね

智也「明久だつてこいつなんだぞ。ほら、わっせつと行くぞ」

陽一「ハア。あいよ…」

今日は俺達が受験した高校の合格発表の日だ。

多くの中学生達が歡喜に湧いたり、悲しみに涙する日である。

だから普通は陽一のように緊張するんだろうが、（コイツの場合は

異常だが…)

俺は普通に合格できる範囲だつたし、試験も解けたから大丈夫という自信がある。

そんなことを考えてたら高校に着いた。

陽一「やべー着いちまつたよ。ヤバいよ・マジヤバいよーー！」

智也「何がヤバいんだ。いいかげんハラくくれバカ」

明久「そうだよ。それに大丈夫だよ。

僕達智也に教えてもらつたんだから大丈夫だよ」

今回の受験のために明久と陽一は智也に勉強を教えてもらつていた。
自慢じやないが中学の時は成績は上位だつたからな。

流石に合格発表の日とあつて学生が多い。

おそらく合格したんだろう、友達同士抱き合つて喜んでいる者、嬉し涙を流している者、ケータイで笑顔で電話している者などがそこにはいた。

陽一「なあ智也君お願いがあるんだけど…」

智也「……なんだよ？気持ち悪いな」

陽一「俺の代わりに合否を見ててくれッ！」

智也「はあ？何でだよ？自分で見りよ」

陽一「極度の緊張により足が動きません…」

智也「お前じんだけビビッてんだよ

……バカなこと言つてないで行くぞ、明久手伝え」

明久「うん」

ガシツ！×2

ズリズリ…

陽一「ちよつ！？やめ、離せ！」

バカなことを言つているアホの襟首を掴んで無理矢理、
合格発表が行われている掲示板に引きずつっていく。

パツ

ドゴォ！

陽一「うザツ！？」

掲示板に着いたので今まで引きずつていた陽一^{バカ}を離す。

陽一「何すんだテメエ！？イテエじゃねエか！？」

智也「うるせエな。わざとだ。それにここまで運んでやつたんだ、
感謝されこそすれ恨まれる筋合いはねエぞ」

となりでまだギャーギャー言つてるバ力を放つて俺は掲示板を覗く。

智也「さて俺の番号ははつと……」

俺の番号は167番だ

智也「おっ あつたあつた」

掲示板には俺の番号が書かれてあった。

智也「やっぱ受かつてたな」

俺が思つていた通り、見事に合格していた。

智也「…で？お前らはどつだつたんだ？」

明久「と、智也！僕も受かつてたよ……」

智也「お、良かつたな明久」

明久「智也が勉強教えてくれたおかげだよ

智也「で、陽一は？」

陽一「…まだ見てない…」

智也「早くしろよ」

陽一「…怖いっす…」

智也「このビデオ…」

陽一「頼むよ？一生のお願いだッ！俺の変わりに見てくれーーー！」

智也「……」こんなで一生の願いなんてするなよ。
まあ土下座でもしたら見てやつても…」

俺は悪ふざけでそういうと

ガバッ

陽一「お願いします」

その場で土下座するアホ。

「こつにはプライドはないのか…

明久「・・・本当に土下座してると

智也「本当にするなよ……わかつた…見るから、土下座やめろ

俺たちがハズかしいから」

陽一「サンキュー…流石、俺の親友だ」

智也「そんな風に思つてんのお前だけだから」

明久「だね」

陽一「…ひビツ…！」

さて、コイツは受かつてんのかね…

陽一の番号を探す……確か番号は159番だな。

番号を探す……

…………

ポンッ

智也「……陽一」

陽一の肩に手を置き、神妙な顔で俺は告げる。

陽一「ど、どうだった…？」

明久「智也、どうだったの？」

智也「……あのは……非常に言こづらいんだが……お前は……」

陽一「……な、なに…？」

明久「え？」

智也「……残念ながら

受かつてたぞ……」

陽一「……そつかあ……ダメだったか……まあ仕方がないよな……
これも運命…………つて受かつてんのかよ！……！」

智也「おおー見事なノリツッコミだな。さすが陽一だ」

陽一「なんでそんな紛らわしいことすんだよッ……！
てゆうか『残念ながら』つなんだ！……！」

智也「そんなの決まってるだろ。面白いからしかないだろ！
それに残念なのは俺だ。またお前と一緒に残念なんだから

陽一「お前最低だな！……！」

智也「まあ落ち着け。良かつたじゃねエか無事合格出来て」

陽一「ぐッ……まあね……そつか合格したんだ俺……良かつた
…………良かつたよー智也くん！……！」

明久「良かつたね陽一

バツ！

急にバカが俺に抱き付こうとしたので俺は……

ドゴォ！……！

陽一「ぶバア！……！」

渾身の回し蹴りを放つてやった。

陽一「イテホじゅねーか！」

智也「気持ちわりイ事してんじゅねエよ……アホが」

男に抱き付かれる趣味はね。

れど、そろそろ退散するか。

何やひ今の一件で立ってしまったようだ。

俺が騒いでいるバカを置いて帰ろうとするど、後ろから突然声を掛けられた。

唯「あの、すいません！け、結果発表、一緒に見てくればせんか！」

振り返ると、若干癖毛気味の少女がいた。

智也「……はあ？ 何で？」

唯「じ、実は……一緒に来てくれるはずの友達が風邪で
来れなくなつて妹も用事で来れなくなつちゃつたんです……。

」

少女は暗い顔でそういう。

智也「そうか……分かった。

一緒に見てやるからそんな顔すんなって

さすがにそんな顔されたら断りにくいしな。

唯「ほ、ほんとですか！？」

智也「ああ。ほんとだ」

陽一「ねえ僕の時と対応違わない？」

智也「気のせいだ」

明久「気にせいだよ」

陽一「いや、気のせいじゃ うべつ」

俺は陽一を黙らせて（腹を殴り氣絶させて）

智也「じゃあ、ちょっと一緒に見てくるから

明久この陽^{バカ}一のこと頼むわ」

明久「わかった。じゃあ陽一連れて先に帰るね」

智也「悪いな。じゃあまたな」

明久「うん、じゃあね」

俺はそういうと癖毛氣味の少女のところへ向かう。
陽一は明久に頼みつれて帰つても「もう」とした。
居ても皆さんの邪魔にしかならないからな。

……………

智也「ほう、セーので見るからな」

唯&智也「「セーのー！」」

自分の番号でもないのに一瞬、ドキッとする。

唯「あ、あつた！やつたー！！！」

あ、そうだ。自己紹介遅れました！

私、平沢唯です。唯って呼んでくださいー！」

智也「俺は中川智也だ。よろしくな平沢」

さすがに初対面の人間を名前で呼ぶのはな……

唯「トモ君だね！！！」

アレホ？いきなり下の名前で？しかももうあだ名かよ。
ちょっとハズかしいんだけど……

そこへ一人の女の子が駆け寄つてくるのが見えた。

憂「お姉ちゃん!」

唯「あ、憂だー!」

智也「……妹さんか?」

憂「用事早く済んだんだ。お姉ちゃん、」の人は?」

唯「あ、紹介するね。掲示板一緒に見ててくれたトモ君だよー!」

憂「お姉ちゃんがお世話になりました。トモさん」

智也「いや、別に俺は何もしていないよ。

それと俺の名前は中川智也っていうんだ。よろしく

「あ、失礼しました。智也さん。よろしくお願ひします。

お姉ちゃん、あだ名付けるのが好きなんですよ!」

そうなのか?

ハズかしいからやめてほしいんだが

唯「トモ君、メアド交換しようつよー!」

智也「トモ君はやめる。ハズかしいから。まあメアド交換はかまわ
ないが」

唯「ええー。可愛いの!」

可愛いってあまつづれしくないな……。

憂「私もいいですか？」

メアド送信＆受信完了。

憂「あの～、よひしければ智也さんも一緒に夕飯どうですか？
といつても、レストランなんですけど・・・。」

唯「ひとつおこしこんだよ！一押しなんだよ！」

うーん、どうするかな。

でも、何かアレだな。

さすがにそれは気まずいな・・・。

智也「・・・遠慮してくれよ。家族でじゅうぶん・・・」

唯「えええ～～！～！」

俺が断りきると平沢姉が声をあげる。

憂「お姉ちゃん、無理言つたらダメよ」

妹は必死に姉を宥めている。余計、断り辛い・・・。

智也「わ、わかった。目線痛いから、そんな顔するな！」

憂「え？良いんですか？智也さんはご家族とは予定ないんですね？」

智也「ああ両親は海外で仕事してて俺、一人暮らしなんだ。」

だから別にかまわないんだが良いのか俺なんかがお邪魔して

さすがに今さつき知り合った人間が
いきなりご家族と食事なんて少し気まずいからな。

憂「それは大丈夫ですよ」

～平沢家～押しのレストラン～

平沢・父「智也君も大変だね」

智也「い、いえ・・・でももう慣れてましたから」

憂「あ、お姉ちゃん！ 口にソースが・・・」

唯「え、どこど〜？」

憂「動かないでお姉ちゃん！」

唯「ありがと、憂～」

本当にできた妹さんだな。

結局、俺は平沢姉妹と一緒に食事に行く事になり、「馳走にまでな
つた。

キャラ紹介（1）

中川智也
なかがわともや

性別：男

誕生日：9月10日（乙女座）

身長：182cm

得意教科：英語・数学

苦手教科：古典

趣味：読書・ゲーム・バスケ・音楽鑑賞・ギター・ベース演奏

特技：料理（明久にはかなわない）・ギターとベース・バスケ

外見：見た目はクラナドの岡崎朋也で、髪の色・目の色は黒、左眉に切傷痕があるので見た目はヤンキー。

性格：中身は家庭的で、女心にも疎い朴念仁。だが、変な所で鋭い。

また、温厚で面倒見も良く陽気な性格であり友達思い。
そして負けず嫌い。

・運動神経がよく、中学時代はバスケ部の部長だった。
・運動神経がいいため雄二並の武力を持つ。

また、成績も優秀で中学時代では常に上位をキープしていた。よつて文武両道。

- ・明久と陽一とは幼稚園からの付き合い。
- ・食べる事が好きで鞄の中にお菓子を常備している。だが、味覚はお子様で酸っぱい物やワサビが苦手。寿司屋ではサビ抜きでいつも頼んでいる。
- ・両親は海外にて仕事をしているので1人暮らし中。

使用楽器
ギター：ホライゾン

春原陽一
すのはらよういち

性別：男

誕生日：2月17日（水瓶座）

身長：167cm

得意教科：保健体育

苦手教科：保健体育以外の全て

趣味：読書・ゲーム・サッカー

特技：サッカー

外見：クラナドの春原陽平

性格：陽気な性格であり友達思いで、家族思い。

- ・サッカー部の先輩が、同級生をいじめている現場を発見し、それを助けるが、暴力を使つたため退部した。このため運動神経だけは優れている。

- ・不良として悪名が立つていて、事を荒立てることを嫌うので、周囲からは「ヘタレ」のレッテルを貼られ、不用意な言動が原因で他者から痛い目に遭わされたり、いらぬ誤解をされることが多い。

しかし心身とも丈夫で立ち直りは早い。

・智也と明久とは幼稚園からの付き合い。

・元々黒の頭髪を染髪して金髪にしている。

鉄人によく注意されているが本人は直す気はない。

- ・妹の芽衣に対しては普段邪険に扱っているが、大切に思つている。家族思い。

- ・異性に対する興味が旺盛で、魅力的な女子を見つけてはすぐナンパしたがる。

しかし成功した試しは今だなし。

- ・勉強は苦手だが、関心事に対する集中力には目を見張るところがある。

キャラ紹介（1）（後書き）

皆さんの感想お待ちしています。

入学式の朝

桜の季節の4月某日。

智也「…よしつ」

俺は鏡の前で自分の姿を確認する。

中学の制服の学ランとは違い、ブレザーを着た俺がそこに映つていた。

まだ着慣れない高校の制服だが、まあ其の内慣れるだろう。

智也「…しかし相変わらずの面だな…」

俺は顔にコンプレックスを抱えている。

顔というよりは『目』だな。俺は『ツリ目』なのだ。
さらに小学校のときに怪我をして左眉のところに傷が少しある。
なのでヤンキーと間違えられていたりする。
最初の頃は髪を伸ばして傷を隠していたが
鬱陶しいのもあり、今では何もしていないが……

智也「そうだ。明久に電話してみるか。

なんとなくまだアイツ寝てそうだし」

俺は明久のことが気になり電話をかけてみる。

プルルルル

明久「はい、もひもひ、吉井ですか？」

智也「おはよう明久。今起きたみたいだな」

明久「ん？あれ？智也どりしたの？」

智也「いや、お前の事だから寝坊するんじゃないかと思つてな」

明久「え？って、ええ！？もひ」「んな時間なの！？」

智也「ありがとう！電話もうりつてなきゃ寝坊するといふだつた
よ」

智也「じゃあ、起きた事だし入学式の時ぐらには遅刻するな。
……あとおそらくないと思つが間違つても姉の制服着てくる
なよ」

明久「そんな間違にするわけ・・・・・・ナイジャナイカ」

智也「おい、今の間は何だ？しかも最後なんで棒読みなんだ？」

明久「えっと昨日準備していた制服が姉さんの制服だった・・・・

・

智也「そつやくじゃないか！？」

一応言つておくが俺達の制服はブレザーだからな

明久「う、うん。ちやんと確認してから着るよ」

智也「じゃあ、また学園でな。遅刻するなよ」

明久「うん。じゃあ、また学園で」

俺は電話をきる。

智也「わたりと、俺もそろそろ行くか。」

今日は高校の入学式だ

途中でパン屋に寄り、カフェオレとパンを買って、店を出ると…

タツタツタツタツ

智也「ん？」

足音か…？ 頭がする方に視線を向けると…

智也「平沢？」

視線の先には平沢がこちらに向かつて走つてきていた。
そして俺に気付く事もなく通り過ぎて行つた。

智也「どうしたんだあいつ？あんなに急いで」

時計でも見間違えて、遅刻だと思ったのか？まさかな。

・・・・・明久や陽一みたいなヤツはそういういなによ。

学校に近付くにつれ、段々と学生の数が増えていく。
歩いていると校門に着いた。

そして同時に見知った人物も見つけた。

その見知った人物『平沢』は、ぼーっと突っ立つて校舎を眺めていた。

周りの上級生や新入生はそんな彼女を一瞥し、過ぎ去つて行く。
あんな場所（校門のど真ん中）に立つていられたら
皆の邪魔になるので声を掛ける事にした。

智也「おはよウ平沢」

唯「ん？ あつー・トモ君ーーおはよウーー！」

声掛けるとひらりを向き、途端笑顔になる平沢。

智也「校舎見上げて何してたんだ？」

唯「いやあ？ 恥ずかしいんだけど時計、見間違えちゃって……」

智也「ん？ どうこいつ事だ？」

ま、まさか・・・・・・

唯「朝起きて時計みたときね、『遅刻だー』って

思つて急いで学校に向かつたんだ」

智也「……」

唯「んで 学校に着いて時間確認したら、

『あれっ！？時間見間違えたあ！？』って想ひて
ぼーっとしてたんだ。いやつへお恥ずかしい

そつ言ひて頭をかく平沢。

(マジか…まさかあの2人と同じようなヤツがこるとは)

唯「どうしたの？トモ君？」

俺が黙つたままだったので、顔を覗き込んでそつ尋ねる平沢。

智也「気にするな。ちょっと考え事をしてたんだ

唯「やうなんだあ

智也「クラス分け、もつ発表されてるんだろう。そつと見てる

唯「うん… そうだね」

「せ

俺は平沢と一緒にクラス分けを見に行こうとする

? ? ? 「唯？」

と誰かが平沢を呼ぶ声がした。

唯「あつー！和ちゃん

「

『和ちゃん』と呼ばれた平沢よりも短い髪に眼鏡をかけた女子が俺達に向かつて歩いて来た。

智也「知り合いか?」

唯「うん! そうだよ! 友達なんだ」

和「珍しいわね。唯が私より先に学校に来るなんて」

唯「いやーははは…ま、まあねえー」

『時計を見間違えて早く来た』とは言えないよな。平沢は冷や汗をかきながら曖昧に返事をしている。

和「ねえ 唯、この人は?」

『和ちゃん』と言われる女性が俺の方を向き平沢に尋ねてきた。そりや当然の疑問だよな。

友達の横に見知らぬ人物が居ればそういう質問になるよな。しかも俺の見た目はヤンキーみたいだからな。

俺が自己紹介しようとすると

和「もしかして、あなたがトモ君?」

智也「えつー?」

何で俺の事知つてんだ!? まさかエスパーか!? しかもトモ君呼ぼわり!? やめて! 恥ずかしいから! —!

唯「うん! そうだよ、この人がトモ君だよ」

智也「ええっと和さんだけ? なんで俺の事知ってるんだ? それとトモ君はやめてくれ。かなり恥ずかしいから」

唯「ああ『ermenなさい。唯から聞いてね。』『新しい友達が出来たんだ』って」

智也（なるほどな、平沢から伝わったわけか。）

そつ思い、平沢に視線を向けると…

唯「えへへ」

と嬉しそうな笑顔を浮かべていた。

そんな顔されるとこちらが照れるじゃ ないか

和「じゃあ自己紹介するわね。真鍋 和です 唯とは幼馴染みなの」

唯「私達ずっと一緒になんだよ」

幼馴染みか、俺と明久、陽一みたいなもんか。
……いや、あの陽一と一緒にされたら可哀相だな。

智也「俺の事は平沢から聞いてると思うが… 中川智也だ。これからよろしくな

和「ええ、じゅうじょよろしくね」

入学式の朝（後書き）

和ちゃん登場です！

皆さんの感想お待ちしています

入学式の朝（バカ登場）

俺達が互いに自己紹介を終えようとしたとき

陽一「そして俺が智也の親友の春原陽一・ヨロシクー！」

朝からテンションの高いバカが出現した。

唯・和「わっ…」「

急に出てきたバカに驚く平沢と真鍋。

「イツは必要な時には出てこはず、全く必要ない時に出て来るな……

智也「お前じつから湧いて出てきた？」

陽一「ヒドいな。人を虫みたいにいうなんて傷つくじゃないか」

智也「いや、お前は虫じゃないだろ」

陽一「当たり前だ」

智也「お前と虫が一緒になんて虫が可哀想だらうが」

陽一「え…? ナーソレ。虫の心配…? 俺虫以下の…?」

智也「なに当たり前なこと言つてんだよ」

陽一「当たり前なのか…? アナタヒドイよ…!」

智也「デケヒ声出すな、うるせヒシウザヒキモイイし」

陽一「そうさせたのアナタでしうがーー

楽しいか！？こんなことして楽しいのか！？
つてキモいつてなんだよーー！」

智也「非常に楽しい。お前をからかうことが俺の生きがいだ」

陽一「最悪だアーーー」「コイツーーー！」

やつひ言つて頭を抱える虫以下生物。

……ああ楽しいなあ。

さてコイツをからかうのはこれくらいにするか、
合格発表のとき同様、周囲からの視線が痛いし……

それに……

唯・和「…………」

平沢と真鍋がポカンと口を開けていた。

和「…………えーとその人は？」

と真鍋から質問が来た。

智也「コイツは一応俺の……友達なのかな？いや、悪友か？」

陽一「一応つてなんだよ。しかも何故、疑問系だ…しかも悪友つてなんだよ」

未だに頭を抱えている陽一が先ほどとは真逆のテンションで呟くように俺に言つてきた。

智也「そっちのほうが面白こからな

陽一「アナタ、本当に最低ですよね」

智也（大丈夫。こんなことするのはお前だけだから）

あえて口にはしないが……

明久「智也ー！陽ー！おはようー！」

そこで明久も合流した。

智也「おはよう俺の親友の明久

陽一「つて明久は親友で僕は悪友なのかよ

智也「当たり前だろ」

陽一「コイツ本当に最低だー！」

明久「ねえ智也？」この人たちは？」

智也「ああ1人は明久も見たことがあると思うが、

合格発表の日、一緒に見た平沢で、こちらは平沢の幼馴染の

真鍋だ」

明久「あ、初めまして吉井明久です。よろしくね」

唯「あつ私は平沢唯だよ」

和「真鍋和です」

明久とついでに陽一に自己紹介をする2人。
すると頭を抱えていた修司は立ち上がり。

陽一「春原陽一です！智也とは親友やつてます！」

満面の笑みで本田一度田の自己紹介という快挙を成し遂げた。

唯「うん…よろしくね明久君、陽一君…」

和「よろしく」

陽一「ヨロシク！唯ちゃん、和ちゃん」

明久「よろしくね平沢さん、真鍋さん」

わつかはあんなにへ「んだたというのにすぐさま元のテンションに戻る。

……切り替え早エな
しかも陽一はいきなり名前で呼んでるし……

唯「明久君と陽一君は、トモ君とはいつから付き合いなの？」

おい、陽一のまえで『トモ君』って呼ぶなよ..
絶対このバカにからかわれる。

明久「僕と智也と陽一は幼稚園からの幼馴染みなんだよ」

陽一「なんだよね」

「へ？ そうなんだ。私と和ちゃんも幼馴染みなんだよ」

陽一「なんだ？」

智也（あれ？ 気付いてない？）

呑氣に平沢と会話をする陽一。

—イツかハたてアホで良か—た！

唯「そういえばトモ君と一緒にクラス分け見に行くんだった。
せっかくだし皆で行こうよ」「うん

智也「そうだな」

陽一「トモ君？」

げえ！？ 気づいた！？

唯「うんつ『智也君』だから『トモ君』」

陽一「トモ君…………トモ君…………クツ…………クツクツ」

何へお前、唯ひせうから『トモ君』つて……ハツハツ——

……って呼ばれてんの！？

アツハツハハハハハハハハ！！！！

腹を抱えながら俺に指をさし、大笑いする陽一。

唯「？」

平沢は状況が分かつてない様子。

智也「……」

そして黙つたままの俺。

明久「陽一、そろそろ笑うのやめないと僕知らないよ

陽一「アツハツハハハハハハ！！！！

ヤベえ笑いすぎて腹イテエ」「

そろそろ黙らせるか……

グッ

体の重心を少し落とし……

そして左足を軸足にし、右足を振りぬく！

智也「消し飛べ！！！！！」

ドゴォン！！

陽一「あぶらッ！－！」

陽一の腹に蹴りをいれる。

3メートル近く吹っ飛びピクリとも動かなくなる陽一。

唯「えつ！？」

絶叫する平沢と

和「やり過ぎなんじやないの？」

あくまで冷静な真鍋。

明久「だから言つたのに」

智也「大丈夫だろアイツなら。

……ほらしい加減クラス分け見に行こうぜ」

和「そうね…行くわよ、唯」

吹っ飛んだ陽一の方を眺めている平沢に声をかける真鍋。

『さうね』ってなかなかいい性格してると、真鍋は…

唯「えつ！？陽一君はどうするの！？」

智也「一人になりたいんだって」

唯「う、うん…そ、うなんだ」

陽一をそのまま放置し、俺達はようやく、学校内へと歩き出した。

クラス分けの結果は

平沢と真鍋とも同じクラスになった。

ついでに陽一のヤツとも同じだが……。

明久とは別のクラスになってしまった。

1 - A

春原陽一・中川智也・平沢唯・真鍋和

1 - C

秋山澪・木下優子・霧島翔子・琴吹紬・田井中律・姫路瑞希

1 - D

木下秀吉・坂本雄一・島田美波・土屋康太・吉井明久

という風になつた。（あいづえお順にて記載）

初日は簡単な自己紹介で終わつた。

入学式の朝 「バカ登場」（後書き）

最後にバカテスメンバーとけいおん！の
メンバーの1年次のクラス分けをしてみました。
愛子は転校してくるのでいません。

皆さんの感想お待ちしています

雄一たちとの出会い（一）

（1-Aの教室・放課後）

入学して2週間が過ぎた。部活はまだ検討中・・・・。

そんな事を考へていると真鍋たちの話しが聞こえた。

和「唯、まだ部活に入つてないの？」

唯「何かしなくちゃいけないと思つてるんだけど・・・」

和「あ・・・いやって一ートが出来上がりついへのね・・・」

智也「・・・さすがにオーバーじゃないか？」

つてかもしそうなら俺も二ートの一員ではないのか？

唯「トモ君は部活決めたの？」

智也「俺もまだ決めてない

和「・・・アナタもなの？」

何その視線は・・・そんな目で俺を見ないでくれ

「でもまあバスケ部にでも入るうかなとは思つてるがな

和「バスケ部に？」

智也「そう。だけど」「ひてそこ」までバスケ強くないから迷つてるんだよ」

和「確かにここバスケ部が強いなんて聞かないわね」

智也「だろ。だからまだ検討中なんだ」

俺は話をきりあげると帰り支度を済ませる。

陽一のバカはどこかに行つてるから明久と帰るかな。

（1-Dの教室・放課後）

雄一「やれやれ……やつてもいなうこと」に文句ばかり抜かしやがつて

雄一は中学の頃は悪鬼羅刹と呼ばれていて少し性格が悪い。

雄一は廊下を独りぐらう。

そして1人で帰り支度をすませていると、

雄一「つと、と・・・・・・」

誰かの机にぶつかり中に入つていた教科書が落ちてしまった。

雄一「」の時期からも「」のザマとは勉強熱心なヤツだな

とりあえず雄一は落としてしまった教科書を拾おうと手を伸ばす。そしてその惨状に気がついた。

雄一「・・・これは酷いものだな・・・・・・」

そこには表紙は破れ、ページはぐちゃぐちゃになっていた。新品で受け取ったばかりなので普通に使用していればまずはこうならない。

雄一はその教科書を拾い裏表紙を見ると

そこには『島田美波』と名前が書かれているのがわかつた。彼女はドイツからの帰国子女でまだ日本語が上手く言えないみたいだった。

雄一「そういえばあいつ、初日にクラスの連中を『ブタ』呼ばわりしてたつけ」

おそらく本人は意味をよく理解せずに言つたのだろうが、それに腹立てた連中がやつたんだろうな・・・

雄一「・・・・まあいいか。俺には関係のない事だ」

雄一はそれをしばらく観察してから、机の中に戻そとする。

その時だった

雄一「つー？」

目の端に高速で動く何かが映った。

頭が判断する前に体が勝手に反応し、その場から大きく飛びのく。

間一髪で回避が間に合い、目の前の誰かの拳が通過する。

この時点でようやく、誰かが俺に殴りかかってきた、といふことを理解した。

雄二は体勢を立て直し、拳の主を見る。

そこには

明久「……………」

雄二とは入学初日から因縁のある人物だった。

雄二「どうじつもりだ、テメエ」

雄二は静かに明久に問いかける。

2人は互いを快く思っていないかった。

雄二は明久のバカさ加減が気に入らず、

明久は入学式の時、雄二がある女性に話しかけられても無視し続けたので、

理由を聞こうとして、入学式初日から騒ぎを起こしたりしている。

明久「…………なに……やつてんだよ……」

雄二「それを聞きたいのはこいつのまつ」

明久「オマエ、その子の席で何やつてるんだって聞いてるんだよー！」

いつものマヌケな姿からは想像つかないような怒鳴り声をあげる明久。

その視線は雄一の右手へと向いていた。

・・・・・正しくは雄一の持つてゐるボロボロの教科書へと。

雄一の脳内では今の状況を整理していた。

雄一の右手のボロボロの教科書・無人の教室
校内に流れる雄一の風評・吉井の先ほどの台詞

それらから思い浮かぶ一つの結論。

雄一「……ま、まさか……おい待て吉井。俺は」

明久「歯を食いしばりやがれこのクズ野郎っ！」

雄一「チツ、このバカ野郎が……落ち着け！これは俺がやつたわけじやねえ！」

明久「ブチ殺す！」

雄一「人の話を聞きやがれ！」

明久は完全に雄一の話を聞いてない。

雄一「なら、ちょっとくら相手してやらあー！」

と、雄一の言葉をかわきりに殴り合いが始まる。

明久「……絶対に……ぶつ飛ばす……！」

雄一「しつけえなーまだやんのかよー！」

雄一は明久と殴りあいながら明久の事を考えていた。

雄一（なんでコイツは、諦めないんだ……？

俺と「コイツじゃ、どつちが強いなんて一目瞭然だろ）

雄一の思つてゐる通り、雄一に比べ明久のほうが傷が多くつた。

雄一「いい加減にしろ、クソバカ野郎が！」

雄一は明久と戦いながら小学校の頃の苦い思い出が蘇る。

明久「……可哀想……じゃんかよ……」

雄一「あアー？」

雄一は一瞬何を言つてるのかわからず聞き返す。

明久「可哀想だと思わないのかよ！あの子は日本に来て
知り合いがいなくて、言葉がわからないのに、
それでも一人で頑張つているんだぞ！

どうしてそんな頑張つている子を虐めるんだよ！」

ボロボロのはずの明久は、力の籠もつた声でそう言つた。

雄一はそんな明久を見て前にも同じような状況を見ている気がした。
いや、違うか。俺はコイツと違つて逃げようとした。

雄一は我が身が大事だった。

だが、明久は

明久「オマエみたいなヤツ許せるもんか！」

ガツン！　と一際大きな音が響いた。

明久は先ほどと比較にならないほどの勢いで吹き飛んだ。

そして雄二も明久の攻撃を食らい視界が揺らぐ

雄二「吉井！ そんなに俺が気に入らないのならかかってきやがれ！
2度と立てないくらい殴つてやらあ！」

明久「言われるまでもない！ オマエをぶつ飛ばして後悔させてやる
！」

雄二「いじりやいやひつむせえんだよー」この雑魚が！

そしてお互いの拳が届く距離まで駆け寄つたところで

智也「そこまでだ！」　康太「……そこまで」

明久・雄二「つー？」

突如2人の前に人影が入ってきた。

雄二の前には智也が拳を受け止め、康太は明久の目の前にペン先を
向けていた。

雄二「邪魔するな！ テメエらには関係ないだろ？ がー！」

康太「……それ以上暴れてもうつては困る」

智也「そうだ。『イツの言うとおりだ』

康太「…………カメラが壊れる」

3人「「「…………はあ？」」「」

康太の意味の分からない言葉に

雄二と明久だけではなく智也まで疑問符をあげる。

智也はてっきり2人の喧嘩を止める為に手伝ってくれたものかと思つていたのだ。

康太はそういうと教室のスミに行きゴソゴソと何かを取り出した。
……あれはＣＣＤカメラか？でもなんであんな所に？

智也「…………まさか盗撮か？」

康太「…………っ！（ブンブンブン）」

康太はすごい勢いで否定している。

雄二「…………けつ。なんだか気が削がれちまつた。命拾いしたな吉井」

雄一はそう言いつと鞄を肩に担ぎ明久に背を向ける。

明久「待てよこの野郎！」

雄二「ぐがつ！」

明久は帰ろうとする雄二の肩を掴んで殴りつける。

智也「おい！明久落ち着けよ」

雄一「…………まだ続けたいようだな吉井」

再び一食触発の雰囲気にかわる。

智也「おい、お前らいい加減に！」

俺が2人を止めようとすると

？？？「キサマハ、何をやつとるかっ！」

3人「「「つ…」」」

突如野太い声に阻まれた。

秀吉「ビハジヤ？頭は冷えたかの？」

そこには女顔で爺言葉を使う同級生。木下秀吉がいた。

智也「今の声もしかしてオマエか？」

秀吉「ビハジヤ？似ておったかの」

一時は秀吉に氣をとられていると明久が雄一に殴りかかるとしていた。

明久「離れて木下さんつーくたばれ、この」

雄二「けつ、ホントにしつこい野郎だ」

智也「お互いいい加減にしとけよ」

ダン！！

俺は2人に前に出て2人の手を掴み床へと叩きつけた。

智也「せつきから言つてるよな。やめろって。ってかなんだこの状況は。

「こじが騒がしいから覗いてみたら2人が殴り合つてるし」

明久「智也止めないで！僕はこの外道をブチのめさないといけないから

雄二「けつ、できるもんならやつてみやがれ」

智也「なんだ2人とも、まだやる気なのか？

それなら俺も本氣でやらせてもらうが？」

秀吉「まったく・・・・。理由は知らんが、
教室でコレ以上暴れられるのはワシもクラスメイトとして見
逃せん。

事情を聞かせて貰えんじゃねえか

明久・雄二「フンッ！」

智也「すまないな……えつと……」

秀吉「ワシは木下秀吉じゃ」

康太「…………土屋康太」

智也「ああ、木下と土屋か。俺は中川智也だ。
こいつ等を止めるのを手伝ってくれてありがとう」

秀吉「よいのじゃ。クラスメイトじゃからのう」

康太「…………自分そのためだ」

智也「で、何が原因なんだ？」

だが、2人は何も喋らうとしなかつた。

秀吉「やれやれ参ったのう」

智也「これじゃ あサッパリわからないぞ」

康太「…………（スッ）」

智也「ん? 何だこれは」

康太「…………見るといい」

そんな中、康太はカメラをいじり動画を見せてくれた。

秀吉「…………脚しか映つておらぬが?」

智也「…………土屋。やつぱり盗撮を」

康太「・・・・・（ブンブンブン）」

物凄い勢いで否定する康太。

2人も不満気であるが動画を見るにした。

雄一たちとの出会い（2）

その後、動画を見ていくと放課後教室の掃除をしている時に島田の教科書が落ちてしまい、掃除している人たちは話に夢中で気づいていなく、気づいた頃にはすでにボロボロの状況だった。

康太「…………これが真相」

康太が画面を操作して画面を消すと、

明久「…………めんなさいっ！」

明久が突然雄一に深々と頭を下げ謝りだした。

雄一「なんだ、いきなり」

明久「その、もう、なんてお詫びしていいか…………
とにかく坂本君気がすむまで僕を殴つて」

雄一「いや。もうお前を殴る場所ねえし」

明久「あ、そつか。えっと、それなら――」

智也「どうしたんだ明久。突然？」

明久「あ、うん。実は――」

つまり明久は雄一が島田の教科書をボロボロしたと勘違いして

この惨状が出来上がったわけだ。

秀吉「しかし、坂本も坂本じゃな。きちんと説明したら良かつたものを。

あの様子じゃと説明しておらぬようじやのハ」

雄二「…………ふん！」

秀吉「何か事情があつたのかのつ？」

雄二「お前には言つてもわからねえよ木下。
んじゃ、用事が済んだから俺は帰るぞ」

明久「あ、うん。また明日、坂本君。それと、本当に『メン』

雄二「けつ」

雄二は明久に背を向け再び鞄を肩に担ぐ。

明久「ねえ智也、木下さん。新品の教科書つて
どこに行けばもらえるか知つてる？」

智也「新品の教科書か・・・・・・」

秀吉「うん? いや、ワシは全然知らんが」

智也「明久。言つておくが秀吉は男だぞ」

明久「え?」

智也「いや、普通わかるだろ?」

秀吉「中川おぬしはワシが男じゃとわかるのか?」

智也「はあ? 当たり前だろ」

秀吉「よ、良かつたのじや。」

皆、ワシのこと女子じやと勘違いしておつてのう」

智也「大変なんだな木下も。それより教科書だ。土屋はわかるか?」

康太「…………（フルフル）」

明久「そつか。購買には売つてないかな?」

智也「購買には売つてないかもな。
もしあつたとしてもこの時間だともう閉まつてるぞ」

明久「ならコピーして」

秀吉「何枚コピーするつもりじや…………」

康太「…………そもそもきちんとした教科書にならない」

明久「じゃあ、アイロンをかけるとか」

智也「服じゃないんだから無理だろ」

明久「僕の教科書に入れ替えるとか」

秀吉「配布された日に全員名前を書いたじゃろうが。
お主の名前が残つておつては入れ変えられんぞ」

康太「…………根本的に解決していない」

明久「連帯責任で皆の教科書もボロボロにする」

秀吉「確かに島田の教科書は目立たなくなるかもしけんが…………」

智也「迷惑だろ」

明久「じゃあじゃあ」

雄二「あーもうつー頭悪いなテメエラは!
んなもん教師に説明すればいいだろうが」

明久「あ、そつか。悪い事してるわけじゃないもんね」

秀吉「そういえばそうじやな。坂本よ。よく教えてくれたのう」

康太「…………盲点だつた」

智也「さすが坂本。優しいな（ニヤニヤ）」

雄二（コイツ最初から気づいてやがったな）

明久「あ、坂本君ありがとう。助かつたよ」

雄二「…………」

坂本が教室から出ようと扉に手をかけると

西村「待て、坂本。」
「何をしている」

皆「「「「「つー?」」」」

明久「筋肉教師・・・・・」

西村「西村先生と呼ぶ」

やばいな。今の状況は。

今教室の状況に明久と雄一の傷跡がある。言い逃れはできない。

明久「先生すみませんっ」

西村「むおつー?」

そこで明久が上着を脱いで筋肉教師の顔にかぶせる

康太「・・・・・失礼」

さらに康太がどこからか取り出したケーブルを上着の上から巻きつけ
簡単に取れないようにする。

秀吉「今のうちにちからにげるのじゃー。」

木下が窓を開けそういう。

が、それは嘘だ。明久たちは扉から脱出し、身を隠す。

俺は匪役をかい、窓から地上に着地し、逃げる。

西村「待て、貴様ら！逃がさんぞ」

筋肉教師はまんまと策にひつかかり俺を追いかける。

俺はそのまま筋肉教師から逃げつけたが、体力が持たずにつかまつてしまつた。

その後、結局明久たちも捕まつたが教科書はなんとかなつたみたいだ。

あの後教師が誤つて新品の教科書を廃品回収にだしてしまつたので、それを明久と雄二が回収車を追いかけなんとか追いついて教科書を手に入れたみたいだ。

その件もあり明久と雄二は仲が良くなり、名前で呼び合つようになつた。

もちろん、協力してくれた秀吉や康太。俺とも仲が良くなり名前で呼び合う仲になつた。

雄一たちとの出合二（2）（後編）

今回は雄一たちを登場させました。

長文になつたため、2話構成で描いています。

皆さんの感想お待ちしています。

軽音部つて何かな？

（後日、Dクラス）

午前の休憩時間

雄一「おい、明久Bクラスのやつらが購買のパンをかけて
バスケやらないかって言つてるがどうする？」

明久「パン！ やるやる。今月は食費がヤバかったんだだから助かる
よ」

雄一「ならメンバー集めるか」

康太「…………手伝つ」

秀吉「ワシも参加させてもらひつかの。なにやら楽しそうじや」

明久「なら僕は智也に声掛けてくるよ」

雄一「ああ、今日の昼休みだからな」

（Aクラス）

俺は陽一と話をしていた。

智也「そういうえば陽一は部活なにかするのか？」

陽一「ん？あー俺は帰宅部だね。いい女探しに行くからな」

智也（あー。コイツらしき理由だな）

陽一「そつこつお前は？」

智也「まだ考え中だ。まあそろそろ決めなことな」

陽一「まあ智也は頭もいいし、運動も出来るし、音楽も出来るからな。

でもバスケでもするのか？」

智也「まあやるなら自分の好きな」としたいからな

俺と陽一が話していると明久がやつてきた。

明久「ねえ智也。今日の昼休み、Bクラスの人たちと購買部のパンをかけてバスケしない？」

智也「ああ、いいな。乗った。雄一たちもやるんだろ」「

明久「うん。あ、陽一もどう？」

陽一「もちろん。僕もやるよ」

明久「じゃあ今日の昼休み体育館だよ」

俺達が会話をしていると今度は平沢が話に入ってきた。

唯「ねえトモ君、軽音部って何かな?」

智也・明久「軽音部?」「

なんていきなり軽音部なんだ?

唯「私ね、軽音部に入部したんだけど何するのかよく分かんないんだあ」

智也「何するのか分からぬのに入部するなよ

…てか軽音部つていつたら…ギター弾いたり、ベース弾いたりして、

バンドとか組んだりするとこうだろ

陽一「へえ~」

唯「えつ ギター…? バンド…?」

そんな単語がでてくるとは思わなかつたみたいな顔をする平沢。
そして陽一お前も知らなかつたのか?

唯「ええ! ううなー? 私、軽い音楽つて書くからてつき
簡単なことしかとやらないと思つたのに…」

智也「簡単なことってなんだよ?」「

唯「口笛とか…」

智也「なんだそのやる氣のない部活」

明久「そうだね」

唯「和ちゃんにも言われた……」

口笛をする部活ってなんだよ……かなりシユールだな。

和「じゃあ 何なら弾けるの？」

俺達の会話を聞いていた真鍋が平沢にそう聞いてきた。

唯「ん？…………力、カスタネット……」

和「……すごく似合つわ……」

智也「…………同感」

陽一「カスタネットか凄いね唯ちゃんは

明久「陽一…………」

なんか1人変な事言つてるがスルーするか

キーン　コーン　カーン　コーン……

休憩時間の終了を告げるチャイムが鳴る。

唯「どうじょう和ちゃん？……」

和「じいじょうひて言われても……」

智也「大変だな真鍋も……」

平沢は真鍋に泣き付いていた……

明久「じゃあ昼休みに」

智也「おつ」

昼休みのバスケはもちろん俺達が勝つておじいちて貰った。

人部

放課後になり明久が俺を待つてる間に、帰りの支度をしていろと…

唯「あの～トモ君、アキ君」

智也「ん？」

明久「え？」

平沢に呼び止められた。

つてかもうトモ君言われるのには慣れた。といつかもつあきらめた。
それに何故か明久もアキ君言われてるし

唯「あのね…お願いがあるんだけど…」

智也「…………どうしたんだ？」

明久「何かあつたの？」

唯「えっとね…………軽音部の部室に一緒に行つてもらえないかな
？」

今まで俯いていた顔を上げそなことと言ひ平沢。

智也「なんで？」

…まあ理由は想像つくけど。

唯「それは、軽音部に辞めますって言いたいんだけど

…一人じゃ心細いし、軽音部に怖い人がいたら恐いし…」

…やつぱりか…

智也「何で俺たちなんだ?別に悪くないが真鍋に頼めばいいじゃないのか?」

唯「…和ちゃん、生徒会があるからつて断られちゃった」

お願いだよー?トモ君とアキ君しか頼れる人いないんだよー!」

やつぱり俺に泣きながら抱き付いてくる平沢。

智也「つて、なんで抱きついて来るんだ!?ひとまず離れる」

唯「やだつ!一緒に行つてくれなきゃ離さないッ…」

早いとこ、この状況をなんとかしなければならない。
なぜなら、周囲からの視線が痛いからだ。

俺に泣きながら抱き付く平沢。

その平沢を引き剥がすとする俺。

更に平沢が「見捨てないで」だの「一人はイヤだ」なんて言つもん
だから…

女子A「中川君、平沢さんに何したの?」

女子B「平沢さんかわいそづ…泣いてるよ…」

「… という、俺がまるで悪人の様な誤解をあたえてしまつてゐる… これ以上「離せ」「イヤだ」の押問答を続けるわけにもいかない。」

それに女子に抱き疲れるなんて今までなかつたから恥ずかしい。

智也「つてか誰も行かないなんて言つてないだろ。

良いよ一緒にやりやがれ

唯「本当に! ?」

明久「優しいね智也は。平沢さん、僕も一緒に行くよ！」

先ほどの泣顔が嘘の様に途端に笑顔になる。

唯「ありがと、トモ君ー、アキ君」

俺は泣き止んだ平沢を連れて明久とともに軽音部の部室である音楽室へと向かつた。

音楽室前

階段を上って、ようやく音楽室に着いた。

ん？平沢が震えてる？もしかして緊張してるのか

そこで後ろから声がかかる。

律「あなたが平沢唯さん？」

唯「はあ～びつくりしたあ～。あ、はい。そうです。」

律「はあ～～ ムギ、お茶の準備だ！」

いやあ～、入部希望者が3人も来てくれるなんて「

え・・・3人ってことは・・・俺と明久も入ってるのか？

智也「いや、俺は・・・」

明久「え？僕は・・・」

律「さあ、入った入った！～！」

智也「お～い・・・」

明久「え？え？」

（音楽室）

澪「軽音部へようこそ！」

紬「お待ちしてました～」

智也「はあ

紬「さあ、召し上がって～

目の前には高級そうな紅茶とお菓子が置いてある。
凄い美味しそうなんだが……

唯「わあ～凄くおいしそう

明久「本当だ美味しそう」

完全に本来の目的を忘れてるよこの人。しかも明久まで。
しかも2人とも幸せそうな顔でケーキを頬張っているし…

智也「はあ…」

すると部長らしき人物が…

律「食べないの？」

と聞いてきた

紬「もしかして甘いもの苦手だったかしら…？」

といかにもお嬢様みたいな女子が申し訳なさそうな顔をしていた。
そんな顔されたら食べないわけにもいかず…

智也「いや、ちょっとと考え事してたんだ。

甘いものは好きだし。じゃあいただきます」

と1口ケーキを口の中に入れると。

智也「…つまつ」

思わず声が出てしまった。そこら辺のケーキ屋より遙かに美味しい。
ケーキは結構食べてるのでだがこれはかなり美味しいかった。

律「そうだろ？ムギの用意するケーキは美味しいんだぜー。」

紬「いえ そんな…」

何故か威張る部長らしき女子と、謙遜する『ムギ』と呼ばれる女子。

澪「平沢さんと…えつと…」

黒髪の女子が俺の方を見て困った顔をしていた。

智也「ああ、俺の名前はは中川だ」

明久「僕は吉井だよ」

澪「あつ…つんつ」

俺の名前が分からなかつたんだろうから教えると、
黒髪の女子はどこかホッとしたような顔をした。

澪「平沢さんと中川君に吉井君はどんな音楽やりたいの？..」

改めて黒髪女子が聞いてきた。

唯「えつー…？」

吉井「あつ」

智也「あ～…」

平沢は今まで食べていたケーキから皿を離し驚いた声を出した。
明久も今頃目的を思い出したみたいだ。

智也「とても言いくらいだが。俺達は入部にきたわけじゃない
からな。

それにコイツも実はギター弾けないから退部にきたんだ
律「えええ！…！…うなのか！？」

待つて、あと一人入部しないと廃部になっちゃうんだよ……」

智也「マジで！？」

俺、そんなこと聞いてないぞ。

律「うん、マジで！？」

明久「どうしちゃう智也

智也「やつこつともな……」

律「そんなこと言わずにせめて演奏だけでも聞いてってよー」

智也「平沢いいか？」

唯「うん！」

智也「じゃあ。聴かせてもらひてもいいか？」

律「もちろん！」

そして俺と明久、平沢は演奏を聴いてみた。

翼をくださいのロツクverか。

にしても、なんだらかの感覚は・・・新鮮だな。

演奏 자체는 정직하고 아름다운 무기고 심으로響く 연주였다.

唯「あんまり、うまくないですね！」

平沢が思つたことをそのまま口にした。

律一ばつせりだー！

明久「言つちやつたよ」

唯一でも、私もこの部に入部します！軽音部に！

智毛一良ののか?

唯「皆さんなんだかすうごく楽しそうでした！だから私もこの部に入部します！！」

律・澪・紬「やつた――」

智也「まあそれでいいなら俺はいいが…」

「キーこ馳走様でした」

明久「じゃあ僕も」

俺と明久は席を立ち帰ろうつとすると

唯「え？トモ君もアキ君も一緒に軽音部入るつよ。
確かまだ部活入っていないんだよね」

智也「まあ、まだ部活は決めてないが……」

明久「うん、僕もだけど……」

そこで部長らしき女子の田がキラリと光る。

律「なら、軽音部に入ろうぜ」

智也「え？」「いや。俺は……」

明久「え？」

唯「そうだよートモ君もアキ君も一緒に入るつよー

律「そうだ！ そうだ！一緒にやろうつよー！」

今なら『副部長』のポジションが空いてるからー。」

そんなポジションは正直いらない

智也「……なんで俺たちを誘うんだ？」

平沢が入部したんだから廃部することは
なくなつたからいいんじゃないのか？」

その疑問をぶつけると…

律「理由は簡単だ！ 人数増えた方が、演奏の幅が広がるからな！」

…あと部費も増えるし……」

おい、今本音が聞こえたぞ

唯「私はトモ君とアキ君と一緒にやりたいなー！」

律「澪とムギも入つて欲しいよな??」

黒髪女子とムギに聞く部長りしき女子。

紬「ええっ もちろん!!」

澪「元々、入部希望者だと思つてたしな断る理由はなによ

あれ?歓迎ムード?

律「ほらほら2人もいいつまつてんだからね~

唯「そりだよ~トモ君~アキ君~」

智也「……」

明久「……」

そうだな。このまま何もせずグダグダするより、一度入つてみるか。
気に入らなかつたらやめればいいだけだしな。
・・・・・・・・それにケーキおいしかつたしな。

智也「わかつた。入部するよ」

明久「僕も入るよ」

律「本当かー?」

智也「ああ、本当だ」

明久「うん、本当だよ」

律・唯「やつたーつ!」「

澪「これで本当に6人目獲得だな!」

紬「はいっ!」

智也「……」

明久「……なんか照れるね//」

俺たちが入部するだけで、こんなに喜ぶ彼女達。
なんつうか…悪い気はしないな…照れくさいけど。

律「そういうえば…えっと…名前なんだっけ?」

智也「ああ、ちゃんとした自己紹介はまだだったな。

俺は中川智也だ。これからよろしく頼む」

明久「僕は吉井明久だよ。よろしくね」

律「智也と明久か。じゃあトモとアキだな。

トモとアキは何か楽器できるのか?」

智也「俺はギターかベースなら出来るやで」

明久「僕はキー・ボードなら」

律「マジで…凄いの入ってきたよ!」

唯「す、ーーい、2人とも…弾けるんだ!」

智也「親が昔バンド組んでいてな。一通り教えてもらつたんだ」

明久「僕は母親に教えてもらつたことがあるんだ」

澪「それでも凄いな」

唯「あ…でも私、全然楽器出来ないし…

あつ・マネージャーとかどうかなー?」

智也「いや…運動部じゃないんだし…マネージャーは…」

紬「そうだー!」

俺達の会話から何やら思い付いたらしい『ムギ』が、こんな提案を俺と平沢にしてきた。

紬「中川君つてギターできるの?ね?」

智也「まあ、ある程度は

紬「なら、中川君が平沢さんにギターを

教えてあげたらよろしこのではないでしょうか?」

律「それはいい案だなムギ」

智也「え?俺が?いや、無理だろ」

律「大丈夫だ。自分を信じる。つてか部長命令」

智也「理不尽な」

明久「智也ならできるよ」

唯「よろしくお願ひします師匠!」

智也「はあ~」

俺は済し崩しに平沢にギターを教える事になった。

軽音部での日々

（後日・教室）

和「へえ、唯って軽音部に入つたんだ」

唯「私、ギター弾くんだよ」

和「え？ 唯、ギター弾けないでしょ？」

唯「うん、弾けないよ。でもねトモ君が教えてくれるんだ」

和「中川君、ギター弾けるの？」

智也「まあたしなむ程度は

和「大変でしようけど頑張つてね

智也「……ああ」

（音楽室・放課後）

唯「うん、おいしい！」

明久「本当においしいね。僕のカロリーが満たされていくよ

明久その言葉にお前の命が危ない気がするんだが・・・・・

智也「本当においしいな・・・・・つて練習――・・・いや、その前に平沢ギターは？」

普通にケーキってる場合じゃなかつた。

唯へつ?

律
—じやあ、今週の日曜にギター見に行くか!」

智也「それがいいだろうな。それがないと練習もできないしな」

「お前が見せてやる」

智也一ああ、これだ

澪 - ESP ホライゾン！？

智也「ああ」

凄
へえ、凄くいいギター持つてるんだな！」

智也「あ、ああ。秋山・・・近い・・・」

紬「漆ちゃん……中川君……」「

「アギちゃん……？」

律「なあトモ！なんか、弾いてみてくれよ。」

紬「私も中川君のギター聴きたい！」

明久「僕も聴きたい」

智也「別に良いけど…………あまり期待するなよ」

俺はギターを抱ぎ、1曲演奏する。

紬「中川君すごい！」

唯「本当に凄いねトモ君」

明久「智也は本当に凄いね」

澪「さすがは、中川…………智也…………だな／＼」

恥ずかしいなら名前で良いの。ってか名前を呼んだだけで顔赤くなるのか？

そりや少し恥ずかしいかもしけないけどそこまで？

ちょっと聞いてみるか…………

智也「なあ田井中？」

律「なに？てか『律』で良いって言つてんじやん

昨日、俺と平沢は改めて自己紹介をし、

その時に田井中が俺の事を『トモ』と呼びだした。

それを聞いた平沢が『トモ君のほうが良い』なんて事言つてたがまあ呼び名なんて今さらどうでも良いが…………もつ平沢であきらめた。大丈夫。俺が慣れれば言いだけの事だ！

で、その折りに平沢と田井中が『名前で呼べ』と言つてきたがさすがに女子の名前を呼び捨てで呼ぶのは少し抵抗がある。だから、今は苗字で呼んでいるのだが・・・・・・

智也「まあ気にしないでくれ。それよりちよつといこか？」

律「結構重要なんだけどな……」

手招きすると愚痴りながらも俺のそばに来た田井中に秋山に聞えないように小声で話す。

智也「（昨日から思つていたんだが秋山つてもしかすると人見知りとかするタイプか？）

律「（ん？ああ　するよ。それに今なら人見知りだけじゃなく、恥ずかしがり屋、寂しがり屋、怖いものはダメ、負けず嫌いという4点セット付きだ）」

智也「（……なんだよ『今ならお買い得』みたいな言い方は……）」

なるほど、そんな性格してたんじゃ昨日あつたヤツの名前を呼ぶだけで赤面するわけだ。しかも俺男性だし。

チラッと秋山を見ると…

澪「…？」

『何の話をじてゐるんだ』と言わんばかりの表情をじていた。

律「（それに……）」

智也「（ん？）」

律「（トモが不機嫌そな顔してゐるからじやないのか？）」

若槻「ヤケながらそんな事を言つてくる。

智也「（昨日も言つたがこの田はは生まれつきだ！
傷は小学校の時に出来たんだ！

俺だつて……俺だつて……」こんな顔……（

律「ちよつー？ひとまず落ち着けトモ」

智也「これが落ち着いてられるか！？」

律「もし生まれつきだとしてもそんな顔してたら

相手に誤解されるよな？という事で笑つてみましょー…あ
笑うんだ！」

そう言つて俺の頬に手を伸ばし無理矢理笑わせようといつ張る。

グニッ

智也「（口…何する

澪「律ッ？」

律「笑顔の練習だよん」

んなことを笑顔で言つてくる田井中。

そして急に俺の類を引っ張り出した田井中に困惑の声をあげる秋山。

とつあえずやられっぱなしへ性に合わなこので反撃に出る事に。

グイッ

智也「田井中!少しは女らしさへしたらいつだ……」の口調とかな

そつ言い田井中の類を引っ張る俺。

澪「中川君ッ?」

律「いやーおーうーーのシリ田ーー」

智也「カチューシャ

律「ヤンキー

智也「俺はヤンキーじゃねえー!」

お互いの類を引っ張り合ってながら口論つする俺達。

…と

澪「…クスツ あははー!」

笑い声が聞えてきた。

澪「あはははっー。」

智也「ん？」

律「…澪？」

澪「い、ゴメン…なんだか2人がおかしくって…あははっー。」

目に涙を浮かべながら俺達を見て笑う秋山。：ツボに入ったようだ。

智也（…笑うと可愛いな）

初めて秋山の笑顔を見た。

律「全くトモのせいで澪に笑われたじゃないか～」

同じく笑いながらそんな事を言つ田井中。

智也（…いや 先に仕掛けたのお前だろ）

そう思つたが口に出さなかつた。

せつから秋山が笑つてんだそれはヤボだな。

そして今度の日曜日、皆で平沢のギターを買いに行く事になつた。

軽音部での買い物

（待ち合わせの商店街）

休日の街を一人で待つている。

今日は平沢のギターを購入するために、
軽音部員と待ち合わせしているためである。

まだ時間があるので音楽を聴きながら待つことにした。

数十分待つこと

全員揃つたので楽器店に向かうため俺達は商店街を歩いていた。

ちなみに女性陣は横一列で歩いており、
俺と明久はその列後ろで歩いている。

何故かつて？そりや恥ずかしいからだよ。

女子4人に対し男2人だぜ！

しかも中学時代女子と買い物なんて行った事ないから恥ずかしいし。

紬「お金は大丈夫だつた？」

唯「うん。お母さんに無理言つて5万円前借りをせてもうつたんだ」

智也（それだけあれば何とかなるな）

琴吹と平沢の会話が聞えてきたので、俺がそんな事を考えていると…

唯「ちよつと見るだけ」

平沢の声が聞えた。

智也（何だ？）

明久「どうしたんだろう？」

とある洋服店に突入する平沢。

呆れながらもちゃっかり付いて行く田井中。

笑顔で洋服店に足を運ぶ琴吹。

その場に残る秋山。

こんな状況だった。

智也「なあ 秋山？」

澪「何… 中川？」

智也「帰つていい？」

澪「ゴメンそれだけは勘弁して……」

秋山は涙目になりながら懇願していく

智也「冗談だ」

とつあえず突っ立つてゐ訳にもいかないので…

智也「とつあえずアイツ等の事頼んでいいか?」

俺はそここの本屋にいるから

澪「え? 行かないの?」

智也「いや、だつて、あそこは女性の服を扱う店だろ。男子の俺らはさすがに入りにくいし……だから、頼む秋山。

そこは察して欲しい」

澪「そうだな。わかつた すぐに連れてくるから」

智也「……了解

そう返事し、秋山は平沢達の後を追い、俺と明久は…本屋に向かつた。

おそらく秋山の性格上すぐつて言ひのほは無理だひしきな。

本屋で新刊のチェックをし、音楽雑誌と漫画を立ち読みしていたら…

.....

澪「お待たせ…」

申し訳なさそうな顔をした秋山がやつて来た。

智也「ああ、大丈夫。ひとまずお疲れさま」

パタンと雑誌を閉じながら答える。

智也「まあ
行こうぜ」

漆「つる」

明久「お疲れさま秋山さん」

今度こそ楽器店へ

が、その後も平沢と田井中、便乗する琴吹に振り回され、
雑貨店、デパ地下、ゲーセン等々……最終的には秋山も楽しんでいた。
まあ俺も明久も楽しんでいたナゾ。

今度は休憩のため、喫茶店に入店する俺達。

唯「はあ～疲れた～」

律「へへ～買ひちつた～」

紬「楽しかったですね～」

口々に言ひ面々。更に…

唯「次ド」「行こつか～？」

明久「ドコがいいかな？」

平沢「が目的地は一つしかないのにそんなこと言ひ。

なので…

智也・澪「「樂器だ 樂器」」

と、俺と秋山の声が重なる。それを聞いた平沢は…

唯「あつせつか 何か忘れてると思ったら…ギターだ

智也「おい、お前ら寄り道しそぎなんだ」

流石にシシ「おめざるを得ない。

律「でも、智也だつて楽しんでたじやないか。

その手荷物見ても説得力ないぞ」

智也「うう……」

俺の隣にはゲーセンでとつたぬいぐるみなどが入った袋が置かれてあつた。

いや、だつてゲーセン行つたんだ。

ブツどらないと……しかも今日は運よく結構取れだし。

・ 紛余曲折ありながらもよつやく本来の目的地に向かう」と二

（10GIA）

澪「女の子ならネックが細いやつがいいぞ」

唯「あ、このギターかわいい」

智也（聞いてないな……）

明久「それ、25万するよ」

唯「やすがに手が出せないや……」

智也「向ひに安いやつがあるが。」

ストラトとかテレキャス系とか色々・・・」

智也（動く気配なしだな・・・）

紬「そのギターが欲しいの？」

「うん」

澪「私も、あのベースが欲しかった時こんな感じだったな。」

。 。 。 。 。 。 。 。

回憶からすると、何か秋山のは違う気がするような

律「私も、あのドラマ買うために

説小治政の歴史

やつぱりな。

紬「あの～、値切るつて？」

律「欲しい物を手に入れるためにマケてもらうことさ！」

モードはドヤ顔するところなのか？

「何か、憧れます」

智也「いや、憧れるか？」

律「じゃあ、みんなでバイトするかー！」

澪「バイトってどんなのするんだる・・・・・・・・」

～音楽室～

律「うん、じゃ、ティッシュ配りとか?」「

澪「・・・・・・・・無理そつ・・・・。」「

明久「ファーストフードとかは?」

澪「それも、無理そづ・・・・。」

智也「じゃあ、これならどうだ?」「

唯「交通量調査のバイト?」

智也「これなら日給もそこそこ良いし、短期バイトだから部活にも影響しないだらうしな

澪「うん、これなら大丈夫!」

「つけて、何のバイトするかは決まった。

軽音部での買い物（後書き）

少し皆さんにお聞きしたいのですが
バカテスキキャラとけいおんキャラのカップリングですが、
どのカップリングがいいなとか希望はありますか？
これはまだカップリングを決めていないので
その参考にしたいと思っています。

また、その時ハーレムありにすべきかも悩んでいます。
その件も含めて感想をいただけると嬉しいです。

アルバイト

（教室）

和「バイト？」

唯「うんつーギター買つためにー軽音部のみんなも協力してくれるんだ」

和「え！？みんなを巻き込んでー？」

唯「うんつ」

和「じゃあ…中川君も？」

唯「？…やつだよ、トモ君も」

和「そなんだ…意外…」

智也「ん？どうしたんだ真鍋？俺のこと見て？何か俺の顔についてるのか？」

和「いや…中川君が唯のためにバイトするって少し意外だなって思つて」

智也「そつか？」

和「中川君つてなんだかめんどくさがりな感じがしたから…」

智也「失礼だな……」

そりや確かに少しばかりはそこまで言われる筋合いはないで。

智也「まあ、今は軽音部のメンバーだからな。

メンバーが困ってるんだから手伝わないとな。

それに俺は平沢にギター教えないといけないんだから
頼まれたことはちゃんとやらないとな」

和「クスツ、そつなんだ。じゃあいつか私も何か頼もうかしら」「ひ

智也「……俺に出来る事なら」

唯「トモ君は優しいからね」「

陽「そつなんだよ智也は優しいからね~」「

と、平沢と……

智也「……誰だっけお前?」

陽「お前の親友の春原陽……親友の名前忘れるなよ……」

智也「え? 親友? 誰ソレ?」

陽「……」

「ん? 黙った?」

いつもなら騒音問題レベルの声で反論していくのに……

陽一 「ふう？」

と息を吐き『やれやれ』と手を上げ首を左右に動かす陽一。
… 何だマイシッ？

陽一 「こいつめうひといろが素直じゃないんだよな？」

良いかい？唯ちゃん、和ちゃん。

マイシはあんな事言つてるけど、照れくさいだけなんだよ」

智也 「……」

唯 「うひ」と

和「若干そんな気はするわね」

陽一 「でしょ？ つまり智也は…」

セヒで俺を指差して

陽一 「シンテ」

智也「うひせひ」セヒ

シユダダダダダダダダダッダダダダダつー！

176 ハート

俺は瞬時に陽一の懷に入り込み、C—NNADの智代並に蹴りを叩き込む。

陽一 「ウゴアー..」

智也「誰が何だつて？もう一度言ひてみる」

口を押え悶え苦しむアホにすゞみを利かせる。
するとアホは…

陽一「…ツ、シンデレ…」

シユダダダダダダダダッダダダダダッ！！

俺は再びを陽一に向けて蹴りを繰り出し黙らせた。

陽一「ウベニ…！」

智也「黙つたか」

唯「陽一君が死んじやつた？…！」

和「多分大丈夫よ」

慌てる平沢とやはりどこか冷静な真鍋。
ちなみに真鍋の言つ通りだな。

コイツはG並みの生命力を誇るからな。

智也「あつ、そうだ。俺このバカに用事があつたんだ」

唯「なんの用事？」

智也「今度のバイト」いつも手伝わせようと思つてな。

まあコイツならバイトの田舎町呼び出しても大丈夫か

（バイト当日・とある道路前）

週末の休日。

集合場所に集つた俺は

スタッフから預かっていたカウンターを皆に配る。

智也「じゃあ4人は2人ずつのペアで

1時間」とに交代しながらやつてくれ

澪「え？ 中川と吉井はどうするんだ？」

智也「俺と明久は別の場所でやるから。

それにスケット呼んでるから大丈夫だ」

唯「それって陽一君のこと

智也「そうだ。じゃあしつかりやれよ。

秋山大変だらうけど頑張つてな。何かあれば俺に連絡していく

れ

澪「ああ、わかった」

俺はこの場所を4人に任せ、別の場所へと向かつ。

陽一「ねえ？ なんで僕がここにいるわけ？」

智也「そんなの簡単だ。手伝わせるためだ」

明久「当たり前の事聞かないでよ」

陽一「僕、一言もやるなんて言つてないよね」

智也「大丈夫。お前の意見なんて聞く耳無いから」

陽一「鬼！悪魔！！」

智也「……上手くやつたら部活のメンバーにお前のこと紹介しないわけでもないが」

陽一「僕達親友だろ！手伝つに決まってるじゃないか！」

本当に調子いいな。

1日目は陽一をからかいながら終了した。

2日目は陽一^{バカ}が途中で逃亡しようとしたが、『男が約束破ると女子にモテないぞ』と冗談交じりでいうと、すぐに戻ってきた。

3日目は琴吹が急用という事でこれなくなつたので、ここを明久と陽一に任せ女子のスケットに向かつた。

そして、

まだ足りないな。

田給80000×3×7=合計168000円

智也「さすがに疲れた」

紬「昨日は本当にすみません。家の用事でそつしても抜けられなくて」

智也「いや、家の用事なら仕方なこと。でも、まだ足りないな」

明久「どうする?」

澪「あと何回かバイトするか・・・」

唯「あの・・・」

智也「ん?..どうした平沢?」

澪「やつぱり、これはみんな自分のために使つて!」

智也「いいのか?」

唯「うん・・・」

明久「けど、それじゃ欲しいギター買えないよ?」

智也「じゃあ陽一の分だけ使つとするんだ」

陽一「なに?..」

唯「早く、皆と練習したいから・・・。

だから、もう一度楽器店に付き合つてくれる?」

いつて、軽音部+によるバイトでギター購入作戦終了

～10GIA～

智也「ムスタングとかどうだ?一応、初心者向けのやつだぞ。って。
・・・・・」

結局、あのレスポールに行くのか。
よつぽど氣になるんだな。

唯「あつ… Hへへ…」

俺達の視線に気付き、曖昧に笑みを浮かべる。

澪「よつぽど氣になるんだな」

律「コツシャー…やっぱまたバイトを…」

智也「だな。今度はよつ金が良いところを探すか」

明久「そうだね。今度は何する?」

紬「あつ… ちよつと待つて?」

智也「ん?」

秋山の言葉に田井中が再びバイトをするかと意気込んで

俺がバイト先を探そうとしよう時

琴吹が何かを思い付いた様子で店員の所に歩いて行つた。

店員と接觸し話し出す琴吹。

澪「…何やつてるんだ？」

智也「さあ……あれ?なんだか店員が慌てだしたぞ?」

澪「何があつたんだ？」

智也「……わからん」

秋山と会話をしていると店員と話していた琴吹が戻ってきた。

細一そのギター5万円で売ってくれるって

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

律一えー！？マジで！？

「何!? 何やつたの!?

智也。漆——

琴吹の口から突如告げられた『5万円価格宣言』に

驚愕の声をあげる田井中と平沢。

だつてこれ25万するんだぞ…………それを5万つて

紬「！」のお店、実はうちの系列のお店で

智也「……マジかよ…」

唯「そ、 うなんだ… ムギちゃん、 ありがとう…

残りはちゃんと返すから…」

何者なんだ琴吹って？

まさか本当に令嬢なのか…………まさか。

平沢は感激の表情でギターの前に座り込む。

律「よかつたな？唯

唯「うんっ！」

智也「これで楽器が揃つたな

紬「やうですね~」

律「よしつー唯…家に帰つたらしつかり練習すんなよ…」

唯「まかせといて…うちはやん隊長…」

互ごとにビシッと敬礼する田井中と平沢。

こつして、 平沢は何とか念願のレスポールが手に入ったとさ。

めでたし、めでたし

平沢家・sides

遂に、あのギターが手に入つたんだ！
これからは、いっぱい練習しなきやね！――

「ギュイイイイン！！！」

「へわあ、ミー＝ジシャンみたいでか」

憂「お姉ちゃん、いなか二・・・」

だつて、凄く欲しかったギターが手に入つたんだよ！

「田も早くアサ君に追いつかなければやーーー色んなこと教えてもらわないとねーーー」

後日・音楽室

『おおおおおおお～～～！～～～』

智也「ギター持つとそれっぽいな」

律「似合つてゐるぞ、唯！」

「えへへ……ねえ、ライブみたいな音出すこなじつあるんだつけ?」

智也「アンプに繋ぐんだ」

平沢は、レスポールをアンプに繋いで弦を適当に弾いた。

ギュイイイン！！！

それは、軽音部というなのライブの始まりの音に聞こえた。

私達の軽音部は、やがてスターにならん。

智也一ああ、そこへたな。

明夕・元張らなしとね

卷之二

智也「今ままじゃ無理だろ」

律一おい!

備ひがケタケタ喋りでいると
平沢か・・・

唯「アンプで音を出すのはもう少し先だね・・・。」

智也「ば、馬鹿、ボリューム下げるーーー！」

俺は、とつさに耳を塞いだが平沢は至近距離で直に聴いたのでグロッキーだ。

澪「アンプから抜く前に、ボリューム下げないとしつなつちやうん
だよ～・・・」

唯「それを先に言つて・・・・・・・・」

智也「・・・あつぶねエー」

相変わらずのケタケタさ・・・

モヤシの花が咲くベスターなんだよな……・・・

アルバイト（後書き）

まだまだカッティング案募集中です。

色々案をいただけると嬉しい限りです。

もちろん智也と明久だけではなく
秀吉や康太でもかまいません！

これからも応援よろしくお願いします。

（放課後）

和「唯」

唯「あつ 和ちやん」

和「一緒に帰る？」

唯「ゴメン？ 部活に行かなきゃいけないんだー」

和「そりなんだ…それじゃあ仕方ないね。

ちやんと部活頑張っているのね」

唯「今日はムギちゃんが美味しいお菓子持ってきてくれるんだ～」

和「え？？」

智也「…………田舎に違ひだら」

唯「あー 田舎君ー！」

智也「じゃあ部活行くぞ！」

唯「うーーーじゃあ和ちやんまたね

智也「じゃあな」

和「うん またね唯、智也」

真鍋に別れを告げ、部活に行くために教室を出る。
もちろん向かうは軽音部室。

ガチャ

唯「いんこひは～」

智也「ちわっす」

挨拶をして音楽室に入る。

中には俺達以外の4人が既にいた。

律「よつつー」

澪「いんこちは」

紬「いらつしゃい」

明久「いらつしゃい」

と4人から挨拶が返つてくる。

紬「唯ちゃん、智也君。紅茶は熱いのと冷たいの、どっちが良い?」

と琴吹が聞いてきた。

唯「私、熱いの!」

智也「俺は冷たいので」

俺と平沢は琴吹の質問に答え席に着く。
席には田井中と秋山、明久が座つており、
3人の前にはティーカップが置いてあった。

つてか俺今普通に答えたけど

智也「なあ 秋山」

澪「えつ 何?」

秋山は話がフラれるとは思わなかつたんだろう。
少し驚いていた。

智也「ここの軽音部だよな?」

澪「あーっ、うん……そつなんだけど……」

俺の言いたい事がわかつたんだろう、苦笑いを浮かべ肯定する。

智也「なんでお茶が出てくるんだ?」

明久「いいじゃん別に。僕としてはカロリーが取れるだけで幸せだよ」

智也「明久はまずはゲームとかの出費を抑えろよ」

明久「…………今月は誘惑が多くて」

智也「今月も（・）だろ…………」

・・・・・・・・・

唯「ねえねえ 何で澪ちゃんはギターじゃなくてベースをやるのと思つたの？」

席に着き澪吹が淹れる紅茶を待つてると平沢が秋山に質問をする。

澪「だつてギターは……は、恥ずかしい……」

智也「恥ずかしい？」

澪「ギターってバンドの中心って感じで、

先頭に立つて演奏しなきゃいけないし、観客の目も自然と集まるだろ？」

……自分がその立場になるつて考えただけで……

ボフンツ！

唯「澪ちゃん……」

頭から煙を出し、倒れる秋山。

智也「おい！大丈夫か秋山！？」

律「それより言つた通りだろ？」

智也「何が？」

律「これが、澪の持つスキルの一つ『恥ずかしがり屋』だ！」
いや、確かに前にも言つてたが何故にドヤ顔なんだ？

にじても・・・・・

智也「纖細過ぎやしないか？想像しただけで、アレって……」

律「そなんだよな。少しでも直つてくれるといいんだけどな～
どうするかな～。

いつそトモに任せてみるか（ボソッ）

田井中は秋山の纖細さが心配らしい。

…意外と友達想いなところあるんだな
最後は何かつぶやいていたが……

紬「お待たせ~ 唯ちゃん~ 智也君、お茶が入りましたよ~」

俺と平沢の前に紅茶が置かれる。

すると平沢は今度は琴吹に……

唯「ムギちゃんはキーボードまことよね。キーボード歴長いの?..」

紬「私、4歳の頃からピアノを習つてたの

コンクールで賞をもらつたこともあるのよ」

唯「へつー? へえーす!」こねえ!

確かにそれは凄いな。

コンクールで賞をとるくらいの実力を持つてるなんて……

唯「アキ君はキーボードいつから習つてるの?..」

今度は明久に質問してきた。

明久「僕は小学校の時かな。母にすすめられてね。

中学のときまで少しあつた程度だから、琴吹さんと比べると全然だよ」

唯「それでも少しはできるんだよね。凄いよ

明久「そうかな」

紺「わあ　いただきましょ！」

気がつけば田の前に、ケーキやらクッキーが並べられていた。

…だからこいつ軽音部だよな？

てか良いのかよ、学校でこんなことして…

唯「疑問に思つてたんだけど…」

平沢、やつとお前も気付いたか…

そりゃそうだ。田の前にこんだけのもんが並んだらいくらなんでも
気付くよな…

唯「ここの部屋つけてやけに物がそろつてるよね～。ティーカップとか

明久「あ、そういうえばそうだね」

智也「そつちかよッ！…つて明久お前もか！？」

唯「えつ…トモ君がついたの…？」

明久「い、いきなり大きな声出さないでよ。ビックリするじゃない
か」

智也「いや…わるい…やはり俺の考えは甘かったんだと
再び実感してしまつて声をあげてしまった…」

こいつには多分俺の勘違いなんだ。
これが正しいんだ。そうに違ひない…つてかそつ思おつ…

明久「で、こここの物つてどうしたの？」

紬「ああ、それは私の家から持つてきたの」

智也「自前なのかー？」

その後俺は彼女達の会話を紅茶を飲みながら受け流していた…

テスト前

～下校中～

部活も終わって下校中。

今田は珍しく誰と一緒に帰っている。

唯「確かにうだつたよね」

平沢は先ほどまで俺が教えていたギターのコードの押さえ方を練習していた。

唯「解です隊長！」

智也「誰が隊長だ」

そこへ

和「唯！中川君！」

唯「あ！和ちゃん！」

平沢は真鍋に向かって手を振る

和「……何それ？新しい挨拶？」

平沢の手は先ほど教えていた

コードの押さえ方のままの状態だった。

唯「今日はねトモ君にな。

ギターのコードについて教えてもらつたんだ~」

和「そうなの」

唯「うん。それで練習中に何度も指がつちやつたんだ~」

和「へー頑張ってるのね」

唯「それでトモ君に指のストレッチの方法を教えてもらつたんだ~」

そこで平沢は俺が教えたストレッチをやってみせる。

和「あまり無理しないでね唯

智也「なあ~真鍋は平沢の幼馴染なんだよな?」

和「え? どうよ

智也「やっぱり勉強とかも教えたのか?」

和「そうね。泣き付いてくる事が多かったからね

智也「放課後部活でアイツに教えているんだが……疲れる

和「あ~」

真鍋は俺の言葉に納得するよつに答える

智也「ぶつちやけ真鍋が凄いと思つよ。

よく今まで教えてくれたな

和一 そうでもないわよ。それに中川君だって吉井君や春原君に
边缘效ててやるこざじやなーの?

免 強 読 本 一 き か し り 一 が い の

「アーリーが、お二つのお母様達に一礼を

それにどうしようもない時はメモだけ渡して勝手にさせてた

さすがに平沢にはそんな事できぬいしな……」

和「私から言える」とは根気強くやることね」

智也「それしかないよな」

唯「ん?どうしたの2人とも」

智也「なんでもないぞ」

和「なんでもないわ唯」

「そう? じゃあ和ちゃん今日は帰るの遅いんだね」

和「うん、図書室で中間テストの勉強してたから」「

智也「そういえば、中間テスト近かつたよな～。
メンドクサイが勉強しないわけにもいかないしな
まあやるなら1番になつてみたいしな。

そういうえば確かに文翔学園の試験は特殊で試験時間内なら何問でも解けるんだよな？」

和「そいうじいわね。

でも今度の試験は上限100点の試験らしいわよ

智也「そりなのかな？なんだ少し期待してたのに」

和「中川君って成績良い方なの？」

智也「まあそこそこだな。中学では上位に名前があつた程度だ。
真鍋はどうなんだ？」

和「私もアナタと同じ感じよ」

智也「なら、今度のテストの総合点数で勝負しようぜ。
負けたほうが雇おう」りで

和「まいいわよ。受けて立つわ」

智也「おー乗りいになーつきつ断られると思つたんだが」

和「またまにはこういつのもいとかなつて思つてね

智也「なら、決まりだな」

和「ええ」

唯「そつかーテストかーつて、ええー？テストおおー？」

智也「驚きすぎだろ……ってか反応も遅いな」

唯「え？ もうテストの時期なの？」

和「いえ、まだもう少しはあるわね」

唯「あ、そつなんだ～私ビックリしちゃったよ～」

智也「まあまだ日にはあるから今から勉強しどけば大丈夫だろ」

唯「そつかあ…もう中間テストなのかあ…

せっかくギター練習しようとしてたのに

和「…………」

智也「その心意気はいいな」

和「…あんた今まで試験勉強なんてしたことなかつたじゃない」

唯「そつかーなら大丈夫だネ」

和「いや…大丈夫じゃないけど…」

智也「…………心配だな」

中間試験

（試験日当日）

カリカリ…

シャーペンが踊る音を奏でる。

5月下旬。

高校生になり初めての中間テスト真っ最中。

智也（出そうなところをかなり絞つて勉強したからな。
おっ！この問題もやったな）

カリカリカリカリ・・・。

まあ、これならなんとか大丈夫か？

・・・・・・・・・・

陽一・唯「……」「

～テスト終了後～

俺と真鍋の前には真っ白になつた平沢と陽一の姿があつた。

和「テスト…ダメだったの？」

そんな2人を見て真鍋が問い合わせる。

唯「…うん

陽一「…さつぱりです」

智也「平沢はともかくお前は予想通りだな」

唯・陽一「……」「

その一言を答え氣力をなくしてしまつたかの様に再び黙り込む。陽一もいつものように反論せず黙り込んでいた。

和「中川君は？ テストどうだったの？」

智也「数学と英語は自信あるな。

ただ国語だが古典が出てたから少しあやばいかもしないな。
そういう真鍋はどうなんだ？」

和「私は、まあまあかしらね」

そつまう奴ほど良い点取るだよな…

智也「まあ後はテストが帰つてきてからのお楽しみだな」

和「そうね。どちらが勝つてるかしら？」

智也「それもお楽しみだな」

～テスト返却日～

教師から名前を呼ばれ次々とテストが返つてくる。

そして次は『す』の順番が来る。

教師「春原」

陽一「ハヒイ！」

智也（声裏返つてんぞ）

陽一は緊張してなのか手と足が一緒にでるという動作で教師の元に向かう。

そしてテストを貰い…

春原「……」

真っ白になつた。

何点だつたんだ？まさか赤点なのか？

ゆっくりした足取りで席に戻り席に倒れ伏した。

教師「中川」

いつの間にかに俺の番までやつてきていたので俺はテストを取りに行く。

結果は

国語66点 数学100点 英語100点
社会83点 理科86点

智也（数学と英語はよくできたな。でも国語がよくないな～）

俺がテストを見て考えていると

教師「平沢」

平沢「ハ、ハイツ！」

いつの間にか平沢が呼ばれていた。

陽一と同じような動作でテストを貰いにいく平沢。

平沢「……」

テストを返してもらひつた瞬間真っ白に。

教師「真鍋」

和「はい」

キビキビとした動作で教師の元に行きテストを貰い、満足げな表情で席に戻る。

智也（あの表情じゃ点数良かつたんだな）

・・・・・

智也「で真鍋、どうだった点数は？俺は総合で435点だ

和「私は476点よ。私の勝ちね」

智也「うげっ！476点…9割いってんじゃないか！？」

クリソ…凄いな真鍋は。俺は国語で足引っ張ったな

和「国語はいくつだったの？」

智也「66点。数学と英語でせっかく満点取ったのに国語が悪すぎた。古典の問題さえ出てなければな

和「え？満点2つも取ったの？凄いわね」

智也「まあでも負けは負けだ。今度メシおごるわ」

和「ええ、お願ひね

智也「で、そこの2人はどうだったんだ？」

和「聞かなくても分かるわね…」

智也「まあな……」

俺と真鍋の前には真っ白になつた平沢と陽一の姿があつたのだった。

中間試験（後書き）

まだまだカツプリング案募集中です。

これからも応援よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4050z/>

バカとけいおん！と召喚獣

2011年12月26日20時50分発行